



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〔展示〕「北大生の学生群像」第Ⅲ期
Author(s)	山本, 美穂子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 8, 44-77
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52349
Type	other
File Information	ARHUA8_005.pdf



< 展 示 >

「北大生の学生群像」第Ⅲ期

1. 展示の企画・場所・期間・風景

2012年3月31日～7月31日にかけて、附属図書館・大学文書館共催展示「北大生の学生群像」(全4期)の第Ⅲ期として「戦前期の北大生の学生生活——北大生、世界と格闘する」を、附属図書館(玄関棟)2階玄関ロビーにおいて、展示ケース4台、パネルボード大5台・小3台を用いて開催した。陳列資料のレプリカ製作と大判パネル印刷は、附属図書館の経費により、業者へ発注した。それ以外の展示物の製作(A3版パネル、展示ケース内の写真パネル、キャプション)は、大学文書館で行った。

展示「北大生の学生群像」(全4期)は、1876年の札幌農学校開校から今日にいたるまでの北海道大学の歴史を、「学生生活」に焦点をあてて、附属図書館の蔵書・大学文書館の沿革資料によってあらかず試みである。第Ⅲ期は、札幌農学校から東北帝国大学農科大学に昇格した1907年から、北海道帝国大学として独立し、1945年に敗戦を迎えるまでの38年間を取り上げた。この時代は、農学部・医学部・工学部・理学部の学生のほかに、予科・農学実科・林学実科・土木専門部・水産専門部・医学専門部の生徒、あるいは看護法講習科・産婆養成所・臨時教員養成所の生徒など、さまざまな人々が北大キャンパスで学生生活を送っている。そのため、展示では、各課程の学生生徒を満遍なく紹介することを心掛けた。本年報で目録を掲載した帝国大学期の簿書が教育制度上の主な展示資料となり、卒業生とそのご家族から寄贈された個人資料の数々が、戦前期のさまざまな学生生活を力強く物語る資料となった。



展示風景

2. 展示挨拶・概要パネル

2-1. 展示挨拶パネル

附属図書館・大学文書館共催展示

北大生の学生群像

1876年に札幌農学校が開校して以来、北大は130年以上の歩みを続けてきました。この間、北大で学士を取得した卒業生は12万人に及びます。さらに戦前の予科・実科・専門部の卒業生、戦後の医療技術短期大学部卒業生、そのほか大学院生・留学生・選科生など、また卒業・修了しなかった学生・生徒も含めば、すばらしく多くの人々が北大で学生時代を送ったことになります。

北大生は、それぞれの時代に、思い思いの学生生活を過ごしてきました。これら諸先輩の学生生活の影像から、私たちは今の学生生活をより充実させるためのヒントを垣間見ることができないでしょうか。

附属図書館は、北大生が時間を忘れて読みふけた図書・雑誌、授業や試験のために必死になって学んだテキストを所蔵しています。大学文書館は、北大生として在学したことを示す文書、学業や課外活動を記録した資料を所蔵しています。また、直接・間接に学生生活の様子を捉えた写真も多数存在します。これらの資料を基に、北大生の学生生活を振り返る企画展示「北大生の学生群像」を4期に渡って開催します。

2-2. 展示概要パネル

第Ⅲ期 戦前期の北大生の学生生活

北大生、世界と格闘する

第Ⅲ期は、札幌農学校が東北帝国大学農科大学として帝国大学に昇格した1907年から、北海道帝国大学として独立し、1945年に敗戦を迎えるまでの北大生の生活を展示する。

この間、北大は従来の農学部に加え医・工・理学部を開設したが、学部以外にも、旧制高等学校に当たる予科、技術者養成に主眼を置いた農学実科・林学実科・土木専門部・水産専門部・医学専門部などがあり、学生生徒数は札幌農学校時代の500名から4,000名以上へと急増した。

この時期、北大生は様々な世界と格闘を続けていた。学問、文化、スポーツの世界はもちろん、中国・台湾・朝鮮・モンゴル・タイ・インドから国境と言語・文化の違いを越えて留学生が入学し、制度的に帝国大学への入学が認められていなかった女性たちが実力でその門戸をこじ開けていった。そして戦争。第二次世界大戦下、ある者は戦地へ赴き、ある者は無実の罪を

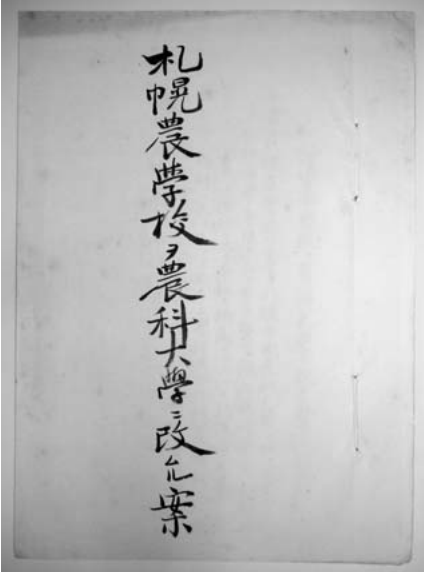
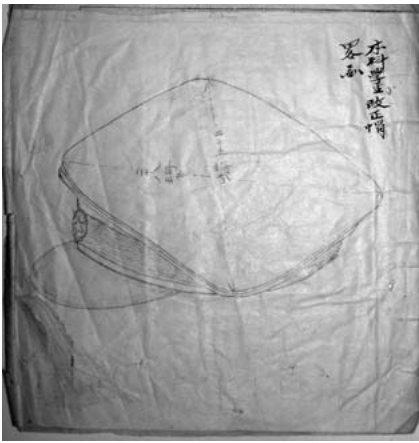
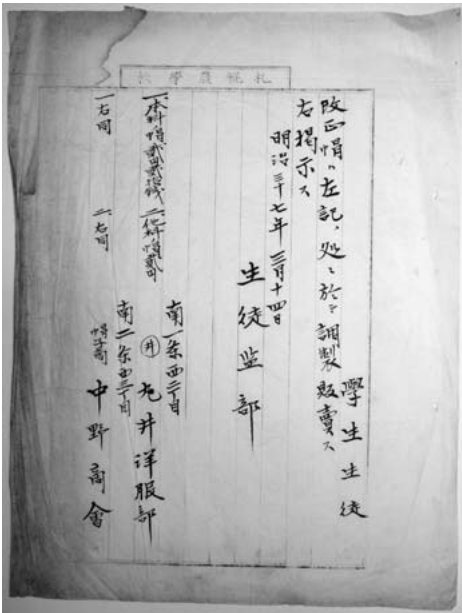
きせられ、ある者は勤労作業に駆り出され、そんな中でも研究に打ち込んだ者もいた。

活気に満ちた時代にあっても、困難な時代にあっても、北大生は常に力強い歩みを続けていた。

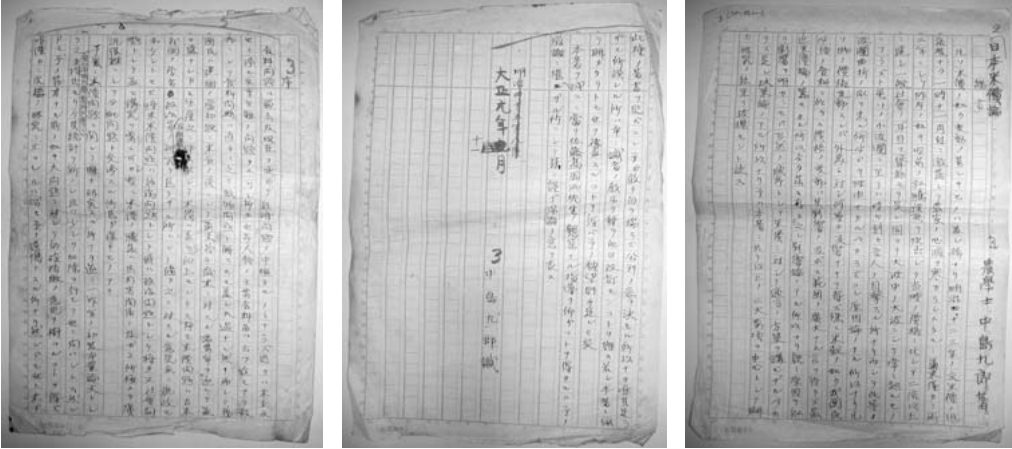
3. 展示資料目録

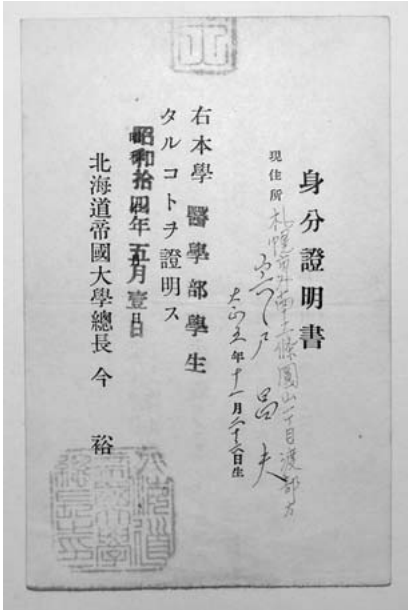
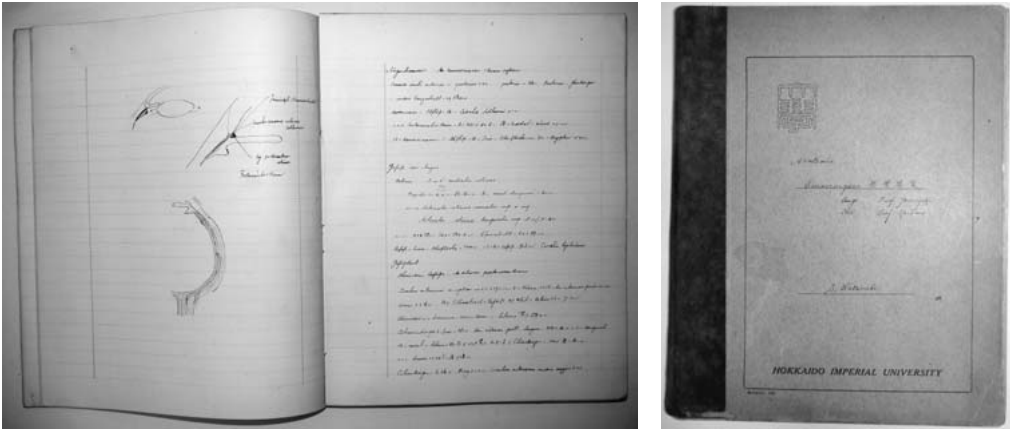
(1) 陳列資料・揭示資料目録

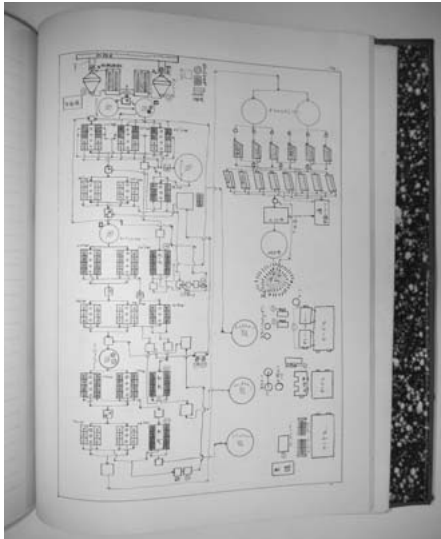
Ⅲ期－P 1	1932年の北大全景	絵画／附属図書館蔵
現存する建物は、林学教室（古河講堂）、昆虫学教室（旧エルムの森）、図書館（北海道大学出版会など）、理学部（総合博物館）、第二農場である。農・医・工学部は以前の建物で、グランドの西側遠くには古い恵迪寮が見える。		
		
Ⅰ．北の大学生誕生		
Ⅲ期－写真1	農科大学正門	写真／大学文書館蔵
		
現在は南門として移設・利用されている。		

Ⅲ期－1	札幌農学校ヲ農科大学ニ改ムル案（1902年）
文書／大学文書館蔵（作物学講座旧蔵資料）	
札幌農学校は東大・京大と同等の大学である、との矜持を関係者は持っていたが、法令上は一段低い「専門学校」と位置づけられていた。札幌農学校にとって「帝国大学」への昇格は悲願であった。昇格運動は、学校内に止まらず、北海道庁や札幌区、地域を巻き込んで展開していった。	
	
Ⅲ期－2	角帽販売の掲示と略図（1904年3月14日）
文書／大学文書館蔵（寮関係資料）	
帝国大学への昇格を見越し、札幌農学校は本科の帽子を角帽に改めた。札幌農学校が大学と同等であるという自負の表われでもあった。	
	

Ⅲ期－3	角帽
	衣類／大学文書館蔵
学生帽には天井が丸い「丸帽」と四角形の「角帽」があった。大学生は角帽を着用し、その他の学生生徒は丸帽をかぶった。角帽は大学生の象徴であった。「大学」の文字をあしらった徽章は帝国大学に共通のもの。	
	
Ⅲ期－4	農科大学生中島九郎の特待生辞令（1908年9月11日）
	文書／大学文書館蔵（越山澄子氏寄贈資料）
特待生には学業優等、品行方正な学生が選ばれ、授業料を免除された。中島九郎（1886-1959）は、3年間連続で特待生となり、卒業時には成績優秀者の証である「恩賜の銀時計」を授かった。	
	

Ⅲ期－5	中島九郎卒業論文増補原稿「日本米価論」（1912年11月）
文書／大学文書館蔵（越山澄子氏寄贈資料）	
中島九郎は、佐藤昌介、高岡熊雄に師事して農業経済学を学び、1910年7月に卒業論文「日本米価論」を提出して卒業した。農学部助手・助教授となり農政学を専攻、「米国土地制度の進歩」（英文）で農学博士号を取得して教授となった。また、『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』や伝記『佐藤昌介』を執筆した。	
	
Ⅲ期－P 2	農学博士号の学位記（1926年12月25日）
証書／大学文書館蔵（谷本晃久氏寄贈資料）	
学位記には北極星と北斗七星があしらわれている。犬飼哲夫（1897-1989）は、農学部を卒業し、動物学教授となった。南極越冬隊のカラフト犬飼育でも有名。	
	

Ⅲ期－6	医学部生宍戸昌夫の身分証明書 (1939年5月1日)
文書／大学文書館蔵 (宍戸昌夫氏寄贈資料)	
医学部は1912年に設置された。宍戸昌夫(横浜市立大学名誉教授)が医学部1年生のときのもの。	
	
Ⅲ期－7	渡辺左武郎受講ノート「解剖学 感官器官」(1931-1932年)
大学ノート／大学文書館蔵 (渡辺絢子氏寄贈資料)	
医学部の解剖学講義の受講ノート。山崎春雄教授(1886-1961)が「目」、児玉作左衛門教授(1895-1970)が「耳」を担当している。渡辺左武郎(1911-1997)は解剖学を専攻して1935年卒業後に助手となり、戦後は札幌医科大学教授・学長を務めた。	
	

Ⅲ期－8	中村雅男「日本鉱業株式会社朝鮮黄海道甕津礦山実習報文」（1938年） 製本ノート／大学文書館蔵（工学部旧鉱山工学科実習報文） 工学部鉱山工学科学生は、鉱山・鉱業所で実地に生産システムなどを学び、実習報文（レポート）として提出した。中村雅男は2年生夏の1ヶ月間、当時は日本統治下の朝鮮黄海道（現在は北朝鮮）の鉱山で実習した。レポートは鉱山の沿革から地質・地床、採鉱・採掘、運搬、保安、選鉱、労働管理にまで及んでいる。 
Ⅲ期－9	工学部生宮川儀八の試験合格科目・論文題目証明（1930年3月31日） 文書／大学文書館蔵（大嶋邦廉氏寄贈資料） 工学部は1924年に3番目の学部として設置された。宮川儀八（1904-2001）は予科を経て1927年に工学部へ進学、1930年に第3期生として電気工学科を卒業した。専攻を活かして北海道配電株式会社（北海道電力株式会社の前身）に就職した。 

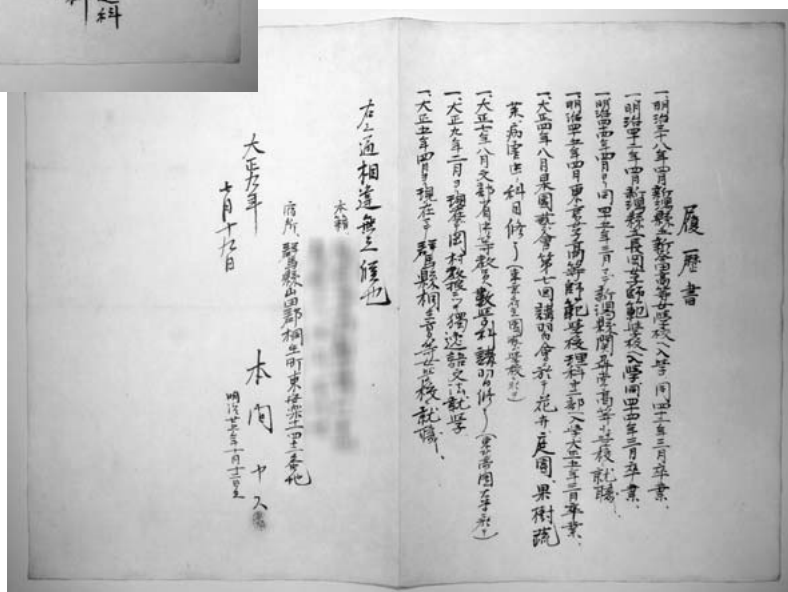
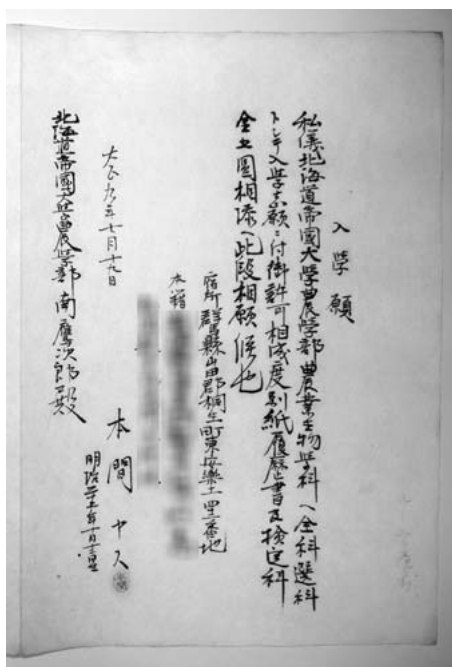
Ⅱ．北大生は切り拓く

Ⅲ期-10

本間ヤスの農学部全科選科入学願と履歴書 (1920年7月19日)

文書／大学文書館蔵 (帝国大学簿書347)

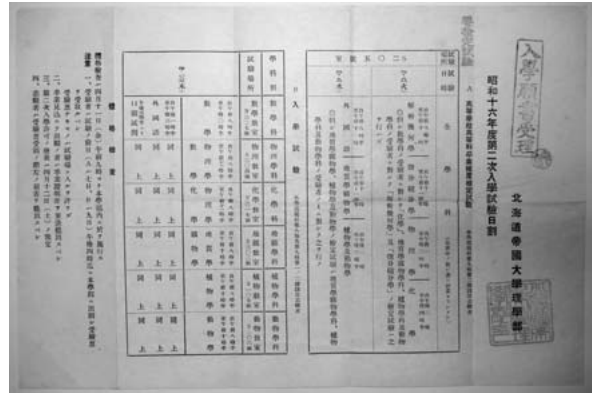
帝国大学は制度上、女性の入学を想定していなかったが、大学を目指す女性の情熱は1910年代にこの「開かずの扉」をこじ開けていった。東京女子高等師範学校 (現お茶の水女子大学) を卒業し、高等女学校教員となった本間ヤス (1892-1959) は、1920年に北海道帝国大学農学部農業生物学科に全科選科生として入学し、加藤セチにつぐ二人目の女性の北大生となった。全科選科生は、正規の学部生ではないが、学部生と同じ講義を受講できた。本間ヤスは1923年に全科選科生を修了後も副手・嘱託として大学で植物病理学を研究し、1936年に農学博士号を取得した。特にウドンコ菌研究の第一人者であった。



Ⅲ期－11 大杉富美子の理学部受験書類（1941年4月）

文書／大学文書館蔵（唐澤隆三氏寄贈資料）

1930年に設置された理学部は、他学部と異なり、女性の正規入学を可能とする制度をとった。女性志願者は、まず高等学校高等科卒業程度検定試験（学力検定試験）を受け、これに合格すると入学試験の受験を認められた。大杉富美子（1918-1997）は、日本女子大学校を卒業後、東京物理学校聴講生を経て、1941年に理学部数学科に入学した。



Ⅲ期－P 3 理学部に入学した女性たち

写真／大学文書館蔵（中山久子氏・佐々保雄氏・唐澤隆三氏寄贈資料）



左上図：物理学科・数学科学生（1939年）

左下図：地質学鉱物学科学生（前列中央：藤原隆代、1943年頃）

右図：クラーク像を見上げて（大杉富美子と渡邊雅、1941年頃）

III期-12

浙江省教育庁からの留学生状況照会文書（1925年3月25日）

文書／大学文書館蔵（帝国大学簿書412）

北大には1902-1945年の間に、中国から379名（うち「満洲国」71名、「蒙古聯盟自治政府」29名）、朝鮮から74名、台湾から9名、インドから5名、タイから1名、計468名の留学生在籍した（許晨氏調べ）。資料は、浙江省教育厅が北海道帝国大学に対し、浙江省出身留学生の状況を照会した文書。調査表に記載がある羅宗洛は植物病理学を専攻して農学博士号を取得し、国立台湾大学校長、中国科学院植物生理研究所長などを務めた。



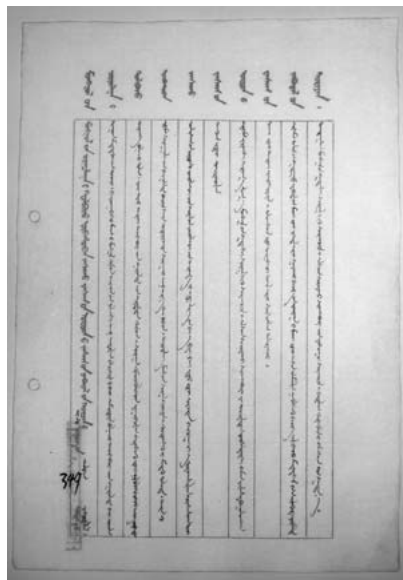
浙江省留日官費生調查表						
姓 名	何其康	許世烈	吳 康	王 康	江 道	趙 康
籍 名	浙江杭州	浙江杭州	浙江杭州	浙江杭州	浙江杭州	浙江杭州
年 齡	二十二	二十二	二十二	二十二	二十二	二十二
學 校	東京帝國大學	東京帝國大學	東京帝國大學	東京帝國大學	東京帝國大學	東京帝國大學
學 費	每月一百元	每月一百元	每月一百元	每月一百元	每月一百元	每月一百元
宿 費	每月三十元	每月三十元	每月三十元	每月三十元	每月三十元	每月三十元
雜 費	每月二十元	每月二十元	每月二十元	每月二十元	每月二十元	每月二十元
總 計	每月一百五十元	每月一百五十元	每月一百五十元	每月一百五十元	每月一百五十元	每月一百五十元

三期-13

「蒙古聯盟自治政府」からの留学生受け入れ要請文書（1938年12月23日）

文書／大学文書館蔵（帝国大学簿書415）

「蒙古聯盟自治政府」は1937年の日本軍進出の影響で、現在の内モンゴルに成立した政府。遊牧生活による畜産が主要産業であることから、北大に留学生の受け入れを要請している。文書は中国語とモンゴル語で書かれている。



Ⅲ期-14	スキー部ペナント（1925年頃）
記念品／大学文書館蔵（持田恭子氏寄贈資料）	
スキー部員の青山馨（附属水産専門部漁撈科1925年卒業）が第3回全日本スキー選手権大会（1925年2月14-15日、青森県大鰐町）に出場した際に使用したと考えられるペナント。ドイツ語で「スキー万歳」と書かれている。青山はこの大会のジャンプ競技で1回目に17.5m、2回目に18.4mを跳び、優勝した。この前後の大会のジャンプ競技で北大スキー部員が4連覇を果たしている。	
	
Ⅲ期-15	走り高跳び優勝カップ（1940年）
記念品・印刷写真／大学文書館蔵（三東純子氏寄贈資料）	
予科2年生秋間哲夫（1920-1997）が1940年6月2日に橿原神宮外苑競技場で開催された「東亜競技大会日本選手選考予選会」走り高跳び競技で2.02mの日本新記録を樹立したことを記念し、北海道帝国大学文武会陸上競技部が贈呈した優勝カップ。この記録はその後18年間破られなかった。秋間は1944年に理学部物理学科を卒業し、戦後は東京大学地震研究所や神戸大学理学部で地球物理学を研究した。写真は競技中の秋間哲夫。	
	

Ⅲ. 北大生さまざま	
Ⅲ期-16	予科入学志願者受験証票 (1926年)
文書／大学文書館蔵 (板倉忠興氏寄贈資料)	
予科は旧制高等学校にあたる課程。北大の学部に入學する最も一般的な方法は、中学校を卒業した後、北大予科に入學して語學と基礎・教養科目を3年間學び、学部に進學するというコースであった。	
Ⅲ期-17	學生手帳と在學証 (1941年7月1日)
文書／大学文書館蔵 (有江敏子氏寄贈資料)	
予科生有江幹男の生徒手帳。最初のページが写真付き在學証になっている。有江幹男(1920-2009)は、1940年北大予科へ入學し、1942年工学部機械工学科に進學し、1945年に卒業した。工学部講師・助教授・教授となり、工学部長(1977-1981)、学長(1981-1987)を務めた。	

Ⅲ期－写真2 掲示板に集まる予科生たち

写真／大学文書館蔵（安田泰次郎旧蔵資料）



Ⅲ期－18 予科生が使用した夏用帽子のリボンと徽章（1935-1939年）

衣類・装飾品／大学文書館蔵（宍戸昌夫氏寄贈資料）

リボンの白線三条（三本の白線）は予科のシンボルだった。徽章は星の周りに桜の枝葉と花をあしらっている。



Ⅲ期－写真3 教室内の予科生たち

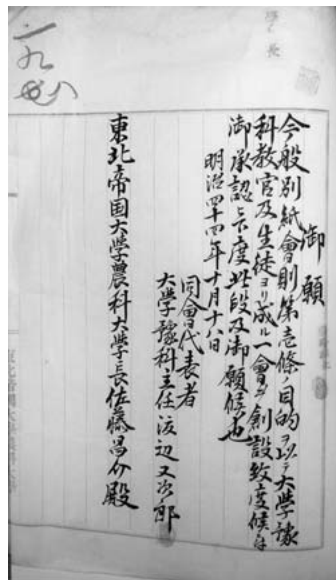
写真／大学文書館蔵

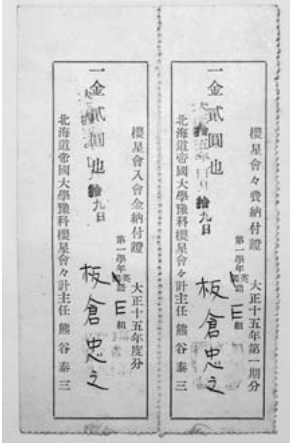


Ⅲ期－19 予科桜星会の創設願 (1911年10月18日)

文書／大学文書館蔵 (帝国大学簿書002)

桜星会は予科教員・生徒の親睦団体で、徽章のデザインから命名された。予科は何よりも生徒同士、そして教員との人間的な結び付きが非常に強いことを特徴としている。桜星会はその一翼を担った学友会組織で、課外活動や様々な催し物、雑誌の刊行などを行なった。



Ⅲ期-20	桜星会入会金・会費納付証（1926年4月19日）
	文書／大学文書館蔵（板倉忠興氏寄贈資料）
板倉忠三（1909-1992）は、1926年に北大予科入学、1929年に予科を修了し工学部土木工学科へ進学、1932年に卒業した。北海道庁技師を経て、工学部助教授・教授となり、交通工学を研究した。	
Ⅲ期-P 4	遊戯会仮装「明治桃太郎害虫駆除」（1910年5月）
	写真／大学文書館蔵（持田誠氏寄贈資料）
第28回遊戯会で、農学実科生が第一農場で披露した仮装行列。害虫被害にあった玉葱・西瓜・豆・大根等の農作物、昆虫学の松村松年教授を模した「マツムラ液」のハットをかぶった紳士、武者のじょうろ、ナースの薬品瓶、たくましい薬品撒布器、イナゴ・ワタムシ・カミキリムシ・毛虫・カイガラムシ等の害虫がそろっている。遊戯会は、札幌農学校開校翌年から始まった運動会で、札幌の年中行事の一つとして、多くの観客を集めた。	

Ⅲ期－写真4 旧図書館の閲覧室にて

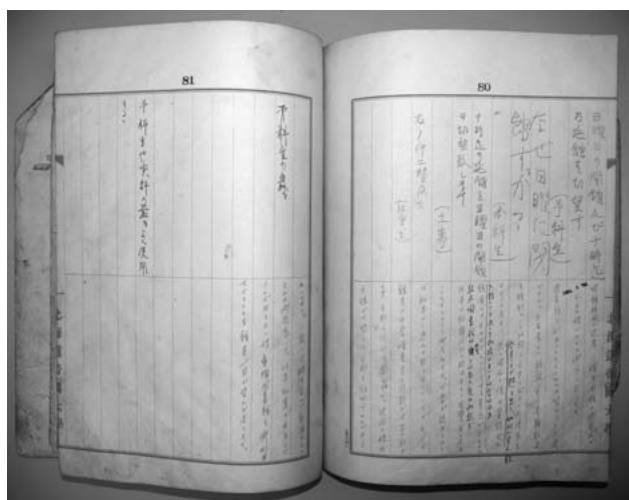
写真／大学文書館蔵 (星野精一氏寄贈資料)

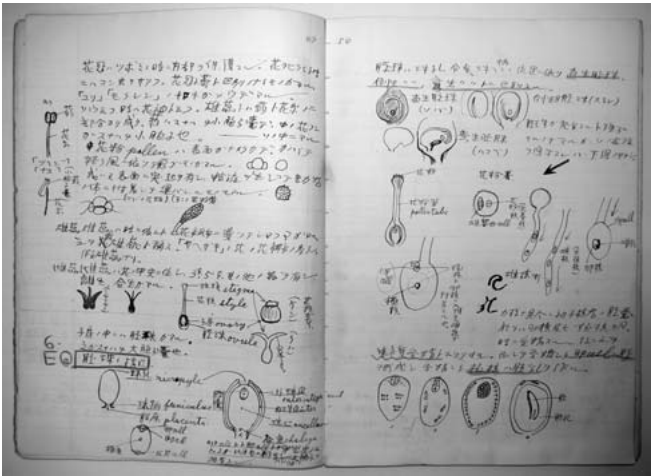


Ⅲ期－21 附属図書館の利用者意見ノート (1935年)

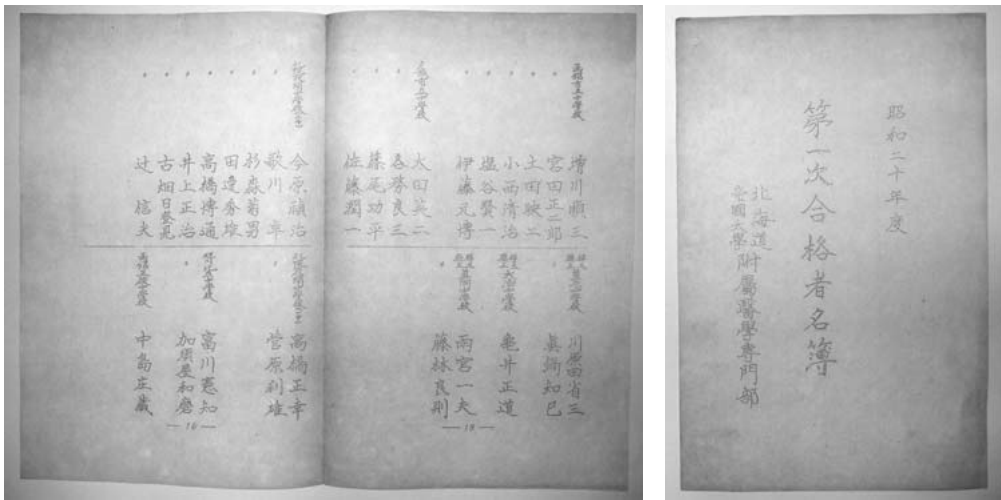
製本罫紙／大学文書館蔵

附属図書館の開館時間延長や日曜日開館を巡って、図書館員は利用者が少ないから難しいと述べ、学生は数字で考えることが間違っていると反論している。現在と変わらない辛辣なやりとりの中に、学生生活にとって図書館がなくてはならないものである様子を垣間見ることができる。



Ⅲ期-22	農学実科生宮本雄一受講ノート「植物」（1943-1944年）
大学ノート／大学文書館蔵（植物学教室旧蔵資料）	
実科・専門部は、中学校卒業者が入学できる実業的な技術者養成に主眼をおいたコース。資料は農学実科1年の宮本雄一が富士貞吉農学部助教授の植物学講義を受講した際のノート。実科・専門部の教員の多くは学部の教授・助教授などが兼任した。宮本雄一は、植物病理学を専攻し、神戸大学教授となった。	
 	

Ⅲ期-写真5	林学実科生の実習
写真／大学文書館蔵（長谷場秀道氏寄贈資料）	
	

Ⅲ期-23	附属土木専門部生の生徒割引証 (1946年12月9日) 文書／大学文書館蔵 (丸山恵照氏寄贈資料) 附属土木専門部1年生丸山恵照の生徒割引証。札幌から故郷の今金に年末年始の帰省をする際に使用した鉄道学割証である。丸山恵照は附属土木専門部卒業後、文学部に進学した。実科・専門部を経て学部へ進学する学生も少なからずいた。 
Ⅲ期-24	附属医学専門部合格者名簿 (1945年) 文書／大学文書館蔵 (帝国大学簿書036) 附属医学専門部は1939年に臨時附属医学専門部として、中国大陆における戦争のための軍医養成を目的に設置された。当初は1学年60名の定員であったが、130名まで拡大されていった。 

Ⅲ期-25

看護法講習科、産婆養成所生徒数調（1935年）

文書／大学文書館蔵（帝国大学簿書104）

看護法講習科は1920年に、附属医院産婆養成所は1921年に、附属医院（現在の北大病院）開設と前後して設置され、看護師や助産師を養成した。これらは戦後、看護学校・助産婦学校、医療技術短期大学部と改組され、現在の医学部保健学科となる。

控

看護法講習科

一、規則

別紙通

二、生徒定員並年別現在生徒数

定員	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年	備考
15	15	15	15	15	15	
計	75	75	75	75	75	

三、既往五年間入學志願者数並入學者数

年度	入學志願者数	入學者数	備考
九年度	15	15	
八年度	15	15	
七年度	15	15	
六年度	15	15	
五年度	15	15	
計	75	75	

北澤道帝國大學

既往五年間卒業生状況

年度	卒業生数	死亡	其他	計	備考
九年度	15	1	1	17	
八年度	15	1	1	17	
七年度	15	1	1	17	
六年度	15	1	1	17	
五年度	15	1	1	17	
計	75	5	5	85	

産婆養成所

一、規則

別紙通

二、生徒定員並年別現在生徒数

定員	生徒数	補習科	備考
15	第一学年 15 第二学年 15 第三学年 15 計 45	補習科 15	備考 15

三、既往五年間入學志願者数並入學者数

年度	入學志願者数	入學者数	備考
九年度	15	15	
八年度	15	15	
七年度	15	15	
六年度	15	15	
五年度	15	15	
計	75	75	

北海道帝國大學

四、既往五年間卒業者状況

年度	計	死亡	其他	計	備考
九年度	15	1	1	17	
八年度	15	1	1	17	
七年度	15	1	1	17	
六年度	15	1	1	17	
五年度	15	1	1	17	
計	75	5	5	85	

年度「隔年度」

Ⅲ期－写真6 看護法講習科卒業記念 (1935-1937年頃)

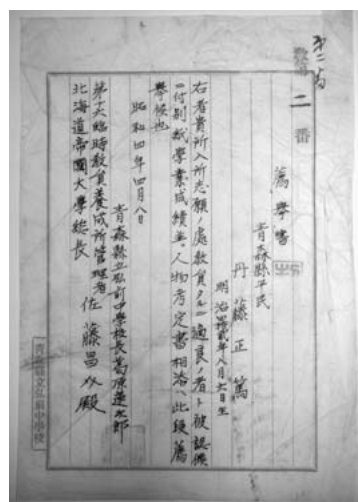
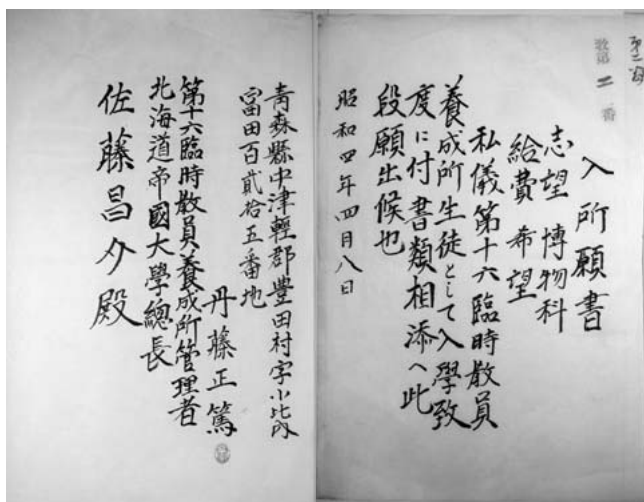
写真／大学文書館蔵 (伊藤愛子氏寄贈資料)



Ⅲ期－26 第十六臨時教員養成所入所書類 (1929年4月8日)

文書／大学文書館蔵 (帝国大学簿書549)

臨時教員養成所は、文部省が1902年から中等学校教員を養成する目的で帝国大学等に設置し、北大の第十六臨時教員養成所は1929-1932年に博物科教員の養成に当たった。これとは別に、戦時下、戦争による中等学校教員不足を補うため、1942年2月、文部省は北大に札幌臨時教員養成所を設置し、数学科と生物科を開講した。



Ⅳ．北大生の戦争

Ⅲ期-27 学生集団勤労作業概要（1938年9月15日）

文書／大学文書館蔵（帝国大学簿書348）

文部省は1938年6月、集团的勤労作業運動実施を通達した。北大では9月1-5日に実施した。戦時下の勤労奉仕の始まりであった。翌年6月には農・工学部生が学内に防空壕を作り、7月には予科生が学内の排水溝掘削を行なった。

Ⅲ期-28 寄せ書き日章旗（1941年10月）

布製品／大学文書館蔵（辺見孝子氏・塗彩子氏寄贈資料）

農学部1年生安孫子三郎が出征するに当たり、大学が行なった「壮行会」で贈られた「日の丸」。今裕総長の「丹心答聖明 祝安孫子三郎君壮途」や、「祈武運長久」（伊藤誠哉農学部長）、「神意建設」（手島寅雄教授）、「祝壮途」（長尾正人教授）、「自強不息」（島善鄰教授）、「不倒不屈」（菊地武直夫教授）などの勇ましい送辞が並んでいる。安孫子三郎は、1941年10月に臨時召集を受け、台湾・サイゴン・シンガポールに従軍し、1946年6月に復員した。



Ⅲ期-29	軍事教練合格証明書 (1943年9月25日)
文書／大学文書館蔵 (唐澤隆三氏寄贈資料)	
文部省は、配属将校が指導する軍事教練を1939年から、大学においても必修化した。週2時間を当てた。	
Ⅲ期-30	唐澤隆三の大学院特別研究生合格通知 (1943年10月5日)
文書／大学文書館蔵 (唐澤隆三氏寄贈資料)	
唐澤隆三 (1918-2011) は、1941年に理学部数学科に入学し数学者を志した。戦時のため在学年限が6ヶ月短縮されたため、卒業後も研究を続けられるよう、大学院特別研究生に応募し合格した。しかし直前に臨時召集令状を受けて海軍兵学校に入校したため、研究を続ける希望は叶わなかった。唐澤の召集が解除となったのは終戦後の1945年9月であった。	

Ⅲ期－写真7、8 宮澤弘幸、ハロルド・レーンとポーリーン・レーン夫妻

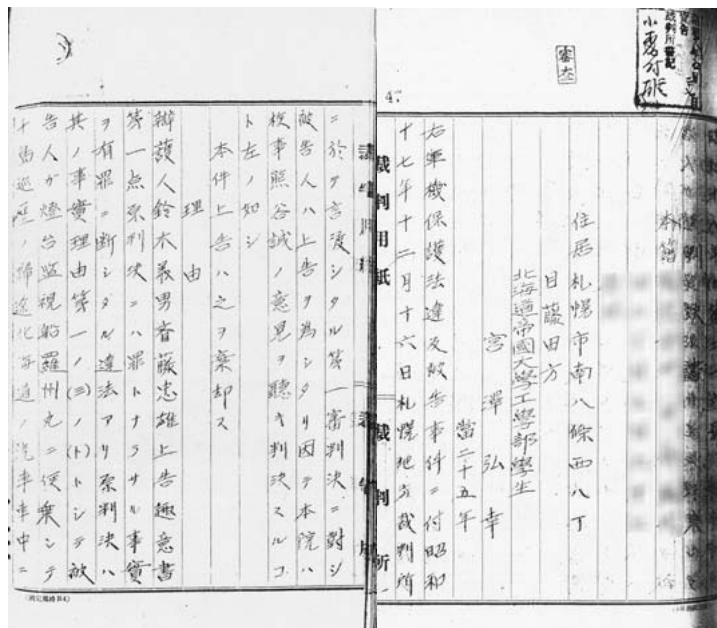
写真／大学文書館蔵（上田圭子氏寄贈資料、宮原孝四郎氏寄贈資料）

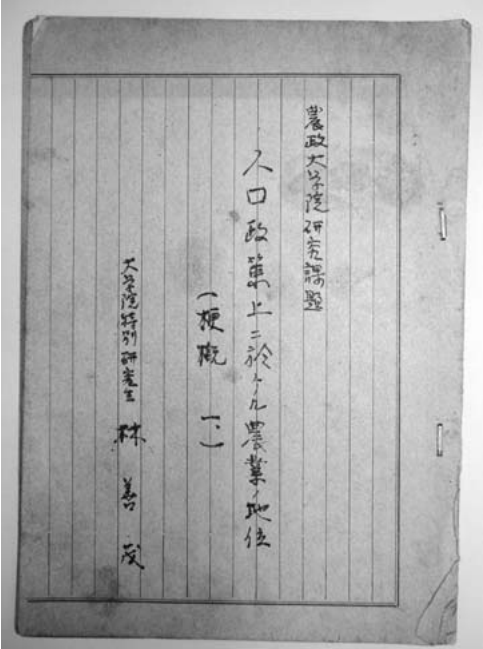


Ⅲ期－31 宮澤弘幸大審院判決書（1943年5月）

複写文書／大学文書館蔵大学文書館蔵（上田圭子氏寄贈資料）

1941年12月8日、工学部2年生宮澤弘幸（1919-1947）、予科英語教師のレーン夫妻らが軍機保護法違反で逮捕された。資料は1943年5月の宮澤弘幸に対する大審院判決書。宮澤は懲役15年が確定した。レーン夫妻は1943年9月に強制送還処分となりアメリカに帰国したが、宮澤はGHQの指令で釈放される1945年10月まで服役し、苛酷な拘禁生活がもとで1947年2月に逝去した。1980年代に弁護士上田誠吉がこの宮澤・レーン事件を調査し、冤罪事件であったことを明らかにした。戦時下の北大における最大の悲劇であった。



Ⅲ期-32	大学院特別研究生林善茂「人口政策上ニ於ケル農業ノ地位」原稿
手稿／大学文書館蔵（林善茂氏寄贈資料）	
林善茂は、1938年予科に入学し、農学部農業経済学科に進学、中島九郎教授に師事して農業経済史を専攻した。卒業後、1943-1945年には大学院特別研究生となった。戦後、農学部助手・助教授を経て、経済学部に移り、教授、経済学部長（1976-77年）を務めた。大学院特別研究生は、在学年限短縮や学徒動員・出陣による大学の研究教育機能低下を防ぎ、戦時研究要員を確保するために設けられた。原稿の紙質の悪さなどに戦時下の研究の困難さを窺うことができる。	
	

- 注 (1) 番号に「P」と記載している資料は、資料パネルにして掲示したもの。
 (2) 番号に「写真」と記載している資料は、展示ケース内に小写真パネルとして陳列したもの。
 (3) 上記以外の通し番号の資料は、展示ケース内の陳列資料。

(2) 回想パネル・写真パネル

Ⅲ期-I-回想1	大学といえば学術の淵叢
村山醸造〔農科大学林学科1916年卒業〕 私が始めて札幌を訪れたのは明治四十一年…十一月に入り、三日の天長節には決って根雪になる雪が降り積り、市中は忽ちキラメキを増し碧、橙黄、白の三原色に彩られる。私の下宿は北一条の通に接していたので、その日は早朝の雪路にシャンシャンと鈴の音がひびき、やがて黒塗りの馬櫓に金色燦爛たる大礼服を長身にまとい、黒色鶏冠状の帽子をいただいた佐藤学長が乗っていて西にむかって迂り去る。大学での拝賀にむかわれるのであろう。大学といえば学術の淵叢で、この近所の住民にとっては遙に遠い存在で尊敬の念はもっているながら自身もまたこの錦絵の一点景となり、角巻の襟を引き寄せ、ゴム長の脚を小刻みに動かし、白い息を吐きながら歩いている。 『札幌同窓会誌』第4号、1970年3月、36頁より）	
Ⅲ期-I-回想2	白壁の殿堂
黒田重治〔工学部土木工学科1928年卒業／第1期生〕 特に我々は今度始めて出来上る工学部の、最初の学生になるのだという強い自負心を抱いて居り既存の農科や理科にまさるとも劣らない強固な団結と新しい学風を創り出したいと胸の中に烈々たる希望を燃やして居たのであります。…其の頃恵廸寮の表玄関よりはるか右手に眺められた工学部の本校舎が次第に竣工に近付いていましたが、それは外面を白タイルで化粧した正に『白壁の殿堂』と言う感じであり、我々はあすの日を夢見て、機会あるごとに、その周辺を歩きまわったものであります。そこには今日見られる様な立派な校庭はなく、エルムの大樹が点在している牧場で、寝そべる牛のまわりを小馬が跳ね廻っているという、北海道特有の風景の所でありました。 『北工会誌』第28号、1965年2月、13-14頁より）	
農学講堂（1928年頃） （大学文書館蔵／星野勇三旧蔵写真帖）	
工学部（1926-28年頃） （大学文書館蔵／星野勇三旧蔵写真帖）	

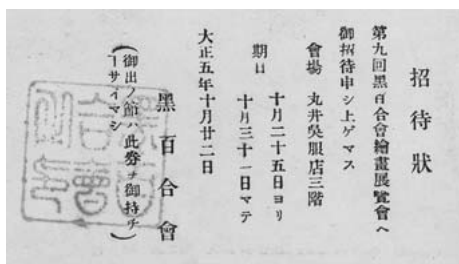
Ⅲ期-I-回想3	蜜蜂のごとく飛び廻れ！
	松藤恒彦〔医学部1926年卒業／第1期生〕
〔医学部1期生の〕同好の士がテニスを始めることにした。しかし校舎はいまだ足場のままのありさまだからコートがあるはずがない。大学構内のあちこちに散らばる空コートを点々として狙って遊んだが、やがて不便を感じ基礎医学部の片隅に丸太土砂の建材置場を見つけ、営繕課の小父さんに「怒らないでネ」の調子で同志力を合せ、蟻のごとく働いてホームコートを捷ち得た。ドサ廻りの劇団も住みつくことになった。名づけて「ドルフクラブ」と呼んだ「常に学生とともに在りたい」の気持ちだった泌尿科の志賀教授を庭球部長に頼んだ。「蜜蜂のごとく飛び廻れ、守銭奴のごとく点を貯えよ」と試合のコートにきて励ましてくれた。…秋の全大学、庭球大会には、毎年優勝するのはドルフクラブ員だった。	志賀亮先生とドルフクラブ員 (1922-26年頃) (大学文書館蔵／医学部卒業記念写真帖) (『北大医学部五十年史』1974年、454-455頁より。[] は補足、以下同様)
Ⅲ期-I-回想4	長い長いカロチノイド
	入江 達〔理学部化学科1933年卒業／第1期生〕
午後は学生実験、物理化学から始まった。オンケルこと富永〔齊〕先生…先生の試験は朝出題されて「出来たら僕の部屋に持って来なさい。夜十時頃までは居るから」と云って出て行かれる。…難問の中に「きれいな水をつくる法」というのがあった…ノメさんこと杉野目〔晴貞〕先生の講義は壮観であった。N三〇ハの大きな教卓の上には実験装置や薬品のビンが所せまし…実験装置はすぐ実験が始められる…黒板一杯使って講義されるが、黒板の端から端まで(真中の仕切りをまたいで)長い長いカロチノイドの構造式を書かれたのにはびっくりした。…実験の手さばきは実に鮮か…先生の第一回の試験の結果は見事全員落第。「もっとよく勉強したまえ！」で三週間後に再試。今度は答案を出した後一人ずつ呼出されて講評と口頭試問とお説教を兼ねた様なもの。それでやっと合格。	理学部化学科の仲間たち (1931年、石狩燈台を背景に) (大学文書館蔵／丹羽喜蔵旧蔵写真帖) (『北大理学部五十年史』1980年、59頁より)

Ⅲ期-Ⅱ-回想5	入学許可を求めてすわり込み
	加藤セチ〔農学部全科選科1921年修了〕
私は大正七年女高師〔東京女子高等師範学校〕の理科を卒業し、一角のインテリになったつもりで教壇に立った…夏休みになり母校の女子学生が北海道旅行にこられ北大を見学をされた時佐藤昌介総長が「この学校は決して女子に門戸を鎖すものではない」とおっしゃられた。よしそれではもう一度勉強のやり直しをしようと思ったのはこの時である。しかし教授会はしかく易々と入学を許さなかった^{〔1〕}。…学長室の前に何日も入学許可を求めてすわり〔込み〕^{〔2〕}…当時学務部長であられ且アメリカ通でもあられた森本厚吉先生等のなみなみならぬお骨折りでやっと農学〔科第〕一部に全科選科生として学ぶ事を許された^{〔1〕}…〔入学後は〕女子学生の、女子師範の名誉にかけて励みました^{〔3〕}。	 加藤セチ（1936年） （『写真集北大百年』No.505より） （〔1〕『札幌同窓会誌』第2号・1967年12月・55頁、〔2〕『ジェンダー研究』第7号・2004年・88頁、〔3〕『三川町史』1974年・962頁より）
Ⅲ期-Ⅱ-回想6(1)	それにつけても、もっと研究を深くしたい
	吉村フジ〔理学部植物学科1933年卒業／第1期生〕
女学校を出ました時なんでも好きな事をやりなさいと母に云はれまして女高師に入りました。〔東京女子高等師範学校卒業後、勤務先の〕学校の先生も大分なれまして面白く思いますが、それにつけてももっと研究を深くしたいと思ひまして、理学部のこちらに出来ましたのを幸ひ志望したわけでした。	 吉村フジと本間ヤス（1937年） （大学文書館所蔵／植物学教室旧蔵写真） （1930年4月22日付『北海タイムス』より）
Ⅲ期-Ⅱ-回想6(2)	金 三純（武宮史枝）〔理学部植物学科1943年卒業〕
理学部に於ける私の学生時代の生活と第一期の吉村様とは切り離せない程大事な先輩であつた。…私達二人は同じ方向の北十六条マリア院〔札幌藤高等女学校〕の方迄其の日の実験についてお話しなどをしながら歩くのであつた。…真心から尊敬出来る人格の持主であつた。私は先生として、姉として、又親友として敬愛して来た	（『北大理学部五十年史』1980年、337頁より）

Ⅲ期-Ⅱ-回想7 「星羊」から「黒百合会」へ

原田三夫〔予科1907年入学〕

「藍野祐之と」二人は文学の会をつくって、原稿をとじた回覧雑誌をだすことを計画し、藍野が会と雑誌の名を「星羊」とした。「星羊」は明治四十年の十二月に第一号が発行された。これが札幌農学校が大学になってからの最初の文学活動である。星羊会には他にも絵の好きなものが加わったので、雑誌「星羊」には絵もとじこみ、その批評をかくことにしたが、これが実に黒百合会の芽生えである。…藍野と私は、こんどは洋画の会をつくることにした。…会の名をめいめいが考えて持ちより投票できめることになっていたが、小熊〔捍〕の「黒百合会」が入選した。当時は学校の農場の原始林に、黒百合の大きいのがたくさんあって、牛が踏み荒していたのである。有島〔武郎〕先生は「土香会」とつけたが、落選すると「このほうがいいのだから——」と言ってしきりに口惜がった。



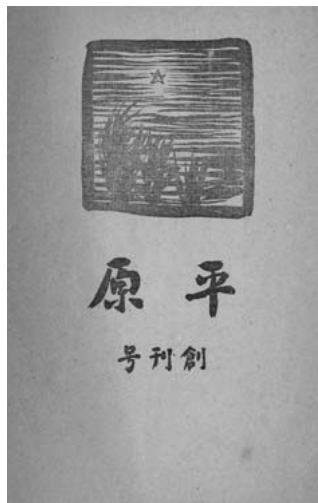
第9回黒百合会絵画展覧会招待状 (1916年)
(大学文書館蔵／高尾君子氏寄贈資料)

(『黒百合会六十周年記念』1966年、3-4頁より)

Ⅲ期-Ⅱ-回想8 『白樺』に続け！

沢村克人〔農業経済学科1926年卒業〕

大正十年の春、予科の同級稲村順三君や二年先輩の本科生菅原道太郎君たちと始めた同人雑誌「平原」は、北大生が街の書店で売りだした文芸雑誌として、…割合に評判もよく、売れ行きも悪くなかったし、もちろん同人たちも嘗ての「白樺」に続けとばかり気負いこんでかかった仕事だった…平原社の文芸活動は雑誌の発行だけではなく、来朝中のロシアのバラライカの名手を招いて演奏会を催したり、武者小路の「新しい村」から版画展を呼んだり、ロシアの飢饉救済の資金集めに文芸講演会を道内各地で開催したり…演劇活動にも手を広げるようになった。…当時薄野にあった錦座…そこを借り切って、平原社劇研究会第一回公演と銘打って開催したのが大正十二年十一月十八日のことである。出し物は翻訳もの二つ、ダンセニイの「地獄の門」とグレゴリー夫人の「光の門」それに菊池寛の「父帰る」と倉田百三の「俊寛」第二幕目であった。



『平原』創刊号 (1921年3月号)
(附属図書館北方資料室蔵)

(『札幌同窓会誌』第3号、1968年11月、88-89頁より)

Ⅲ期-Ⅲ-回想9 予科英語で、恋愛至上主義？

中島廣吉〔予科1910年卒業〕

明治四十年に農科大学になって、その第一回の予科生として、百五十名が入学許可となった。…有島〔武郎〕先生はホイットマンやミゼラブルを教科書に用いられた…試験には応用問題として英語を出されたが、デージー雛菊という詩のときなど出てくる単語が普通でないので、当時流行の恋愛至上主義のものと考えて、珍無類の答案を出したので笑われてしまった。…吹田順助先生の独乙語も面白かった。レクラム版の小説で題は忘れたが相当にむつかしかったが、途中であまりキワドイから教室では遠慮すべきであるとして別の小説にとりかえられた。…予科では外国語の時間が非常に多く…その予習に辞書を引くのに追われて、数学等の方に手が回らなかった。おかげで毎学期のコンデー宣告には…数学は約半数がコンデーであった。二学期つづきのコンデーはアベコンと称えて落第の予告となった。



ポプラ並木と予科生（1935-38年頃）
（大学文書館蔵）

（『札幌同窓会誌』復刊号、1966年12月、34-35頁より）

Ⅲ期-Ⅲ-回想10 恵迪寮の豚めし

横山芳介〔予科1914年卒業〕

〔予科生が入寮していた恵迪寮では〕一週間の献立の中に、豚めしといふのが昼飯の時にあるんです。豚の小さい肉片がころゝと黒ずんで、牛蒡、にんじん、こんにやくの棒状にきざまれたのと一緒に炊き込まれたのが、殺風景な瀬戸引鍋の豆腐汁と一緒に出る、昼には四人で一つのお櫃が三人位でからになって、時には隣りのお櫃に手を出す猛者もある。豚のやうに喰ふといふと勿論上品には聴えも見えもしまいが、豚飯を豚のやうに喰ふ、猛烈な食堂風景は、とてもその中から、青春恋愛情景の製作者となる人が出やうとは思へないでせう。かんからかんのお櫃を叩いて、給仕に炊事場からお櫃のお代りを請求する豚飯時代といふものは、それ以来二十年、追がに自分の家でこの豚めしを炊かせて喰べやうといふ気は出ませんが面白いものでした。



恵迪寮炊務委員と厨房の人々（1938年頃）
（『写真集北大百年』No.286より）

（『恵迪寮史』1933年、93-94頁より）

Ⅲ期-Ⅲ-回想11 鱒・鱒・鯉

◆大正三年の漁業実習航海も大きい思い出の一つである。忍路丸でカムチャツカ西岸オゼルナヤ沖で鱒を満船し淡水補給のため幌筵島に寄港し幌筵川をボートで遡上、川水をボートに汲み入れ本船に運ぶ作業である。この作業中に多数のマスの遡上してるのを発見、直ちに作業を中止し曳網で一網打尽の大漁、久し振りに珍味に舌鼓をうった。

(江田武雄：水産学科漁撈部1915年卒業)

◆今日は鯉の試食会だというので張り切って養殖実験室へ出かけた。藤田先生厳然として着席、渡辺先生の御先導で鯉の肉片の盛られた皿がつつぎと運ばれた。さてこれから始めようということになった。然し肉片には何んの調味料もついていない、それはその筈である、肉片はかみしめて舌の感覚に訴えてその結果から餌料の配合と肉味の審査をするのである。肉片の異なる毎にうがいをして舌面を清めてかかるのである。これには食い気の多い連中もがっかりしてしまった。

(横澤正夫：水産専門部養殖科1927年卒業)

(『親潮 北海道大学水産学部創基五十周年記念誌』1957年、165・206頁より)



忍路丸 (1920年代)

(大学文書館蔵／星野勇三旧蔵写真帖)

Ⅲ期-Ⅲ-回想12 白髪の農学博士がサク ―

中川素水〔農学実科1915年卒業〕

私は、入学前までは農業に就ては、何等知識経験もなく、汽車の窓から見たのでは葱と麦との区別もつかなかったし、米の成る木も知らなかった。…入学してみると、高等農林程度の学科の外に一週三回午後には農場実習がある、初日に各自一アール程の畑が割当てられて、耕地せよ、といわれたが草が一面に生えてるし、どう手をつけるのかさっぱり判らない、皆のやってるのをまねてやってみるが、生れて始めて鍬というものを手にしたのだから大変だ。鍬をふりあげ一生懸命やっていると、後で「君々！」という声、ふり返ってみると科の主任教授の南鷹次郎先生だ「無暗に高くふりあげても疲れる許りだ。貸して見給え」と白髪の農学博士がサク ―と見事な鍬使いには驚いた。教わった通りやってみるが、鍬先を脛にぶっつけるやら、手にまめを作るやら、しかも人の半分も仕上がらない。泣きたい気持ちでいた。



農業実習 (1926-28年頃)

(大学文書館蔵)

(『札幌同窓会誌』第4号、1970年3月、27-28頁より)

Ⅲ期－Ⅳ－回想13

「赤い紙」

安孫子三郎〔1941年農学実科卒業・農学部農学科入学〕

〔1941年〕私は偶々、農学科食用作物学教室に進むことができ、勉学を続ける機会を与えられたのであるが、この年の半ばを過ぎる頃から、日本をとりまく国際関係は、極度に悪化し、将に一触即発と云った緊迫感が、我々学生にも、肌で感じられた。私が召集令状を受けたのは、こんな時期…学園の樹木が色づいて、いやに、印象的であったことを覚えている。…たしか、土曜日で、午前講義は、経済の松田〔武雄〕先生であった…夕刻、暗くなってから帰宅したら、一人で留守居をしていた妹から、役場（旧琴似村）の人がもってきたと云う「赤い紙」を手渡された。そのときは、一瞬、遂に来るものが来たと云った感じで、愈々、自分の運命に区切りをつける感じが来たのだと、自分に云い聞かせて、覚悟を決めた事を思い出す。

（安孫子三郎草稿『日の丸』のはたより）

Ⅲ期－P 5

戦時下の大学の様子

写真／大学文書館蔵



左上：軍事教練（正門、1930年代後半）

左下：今裕総長の日米開戦訓（中央講堂、1941年12月8日）

右：林学実科生小松禎三の出征壮行会（中央ローン、1938年）

Ⅲ期-Ⅳ-回想14 ネズミのお世話になった

小川周三〔農学部水産学科1946年卒業〕

当時の物資不足は甚だしく、私が使用を許された薬品は鯨の胃袋からペプシンを抽出するために用いる塩酸しかないという状態でした。戦時研究でも極めて限られた薬品それも不足がちで実験には皆苦心しておりました。…終戦間近の頃は学校を空襲から護ろうと宿直制が実施され交替で宿直したのですが、どうせ泊るならと宿直当番以外の者まで燈下管制下徹夜の実験を進めた者もあり、正に戦時研究で日夜奮戦した仲間の顔が浮かびます。…食料難の頃、時にネズミのお世話になった。化学第一講座では耐寒食の研究を行っておりネズミを飼っていた。ネズミの飼料用の澱粉、バター等は遅滞なく届いていたらしい。徹夜研究(?)の際第一講座の某君の御好意でネズミの上前をはねた…団子造りのノウハウが開発され、連夜とはいわぬまでも時に手造りの団子を囲んで鋭気を養った次第であります。

(『札幌同窓会誌』第8号、1984年11月、59-60頁より)

Ⅲ期-P 6 本を立ち読みする予科生 (1943年)

写真／大学文書館蔵

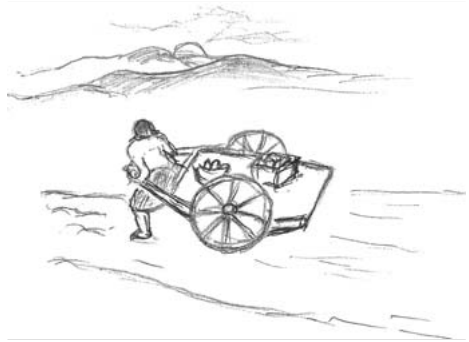


足にゲートルを巻いている予科生たち。ゲートルは軍事教練と共に大学でも普及した。

Ⅲ期－Ⅳ－回想15 大八車に積んでゴロゴロ

山西貞〔農学部水産学科1946年卒業〕

〔1943年10月農学部へ入学し、〕二年目頃から世の中は戦争の影響が深刻になり、配給のお米に昆布が混ぜられる様になりました。炊くと大きく膨脹した昆布に御飯が点々となっている、そんなのが主食でした。学生達は軍事訓練もあり、相当空腹になったと思います。農家にアルバイトに出かけ食糧を獲得して飢えを癒す人もありました。私も日曜には琴似の農家に朝から出かけ、デントコーン刈りや馬鈴薯掘りなど手伝い、手稲の山が夕日に映える頃、お礼に貰ったカボチャやお薯を大八車に積んでゴロゴロ札幌まで曳いて帰ったものです。…戦局は日増しに悪化し、理工科系学生以外の学徒動員が始まりました。角帽に学生服、ゲートルをきりっと巻いて出陣して行く学生の姿…大学構内では寮歌に代って学徒出陣の歌が聞かれるようになりました。



（回想文：『札幌同窓会誌』第5号、1979年12月、50頁。

図：『札幌同窓会誌』第17号、2004年11月、96頁）

Ⅲ期－P 7 低温科学研究所でのカボチャ・ジャガイモ収穫記念（1940年代）

写真／大学文書館蔵



現在の文系校舎付近

- 注 (1) 番号に「P」と記載している資料は、写真パネルにして掲示したもの。
 (2) 番号に「回想」と記載している資料は、回想パネルにして提示したもの。
 (3) 回想パネルの引用文中、明らかな誤字は訂正した。